様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｈ０５１５４

研究課題名（和文）言語・文化調査に基づくタイ文化圏の少数民族の歴史の解明

研究課題名（英文）Linguistic and cultural approach to the history of minority peoples in the Tay Cultural Area

研究代表者
新谷　忠彦（SHINTANI, TADAHIKO）

東京外国語大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：９０１１４８００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　7,200,000円

研究成果の概要（和文）：大陸部東南アジアの歴史は、従来中国やビルマなどの中央集権的な権力組織を作り上げた「国家」を中心に語られるばかりで、これとは違った構造を持つ社会はほとんど無視されてきた。現在ではビルマ、タイ、ラオス、中国の四か国にまたがる山間盆地地帯（タイ文化圏）では、13世紀から20世紀にかけて盆地部分を支配するタイ系民族が周辺の山地民をその社会に組み込む形で数多くの「小王国」を形成していた。このような「小王国」が近代国民国家形成の流れの中でなぜ消滅してしまったのか、という疑問を本研究計画で解決できた。
また、本研究計画により数多くの未知の言語が発見・記録され、歴史言語学に数多くの新たな知見をもたらした。

研究成果の概要（英文）：The history of continental South-East Asia has been treated mainly from the viewpoint of the strong political powers such as China or Burma, and the existence of small " kingdoms" from the 13th to the 20th century in the mountaneous border area spreading over China, Burma, Thailand, Laos has been mostly neglected. Our linguistic and cultural approach finally succeeded to find an appropriate answer to the question "why these small "kingdoms" disappeared under the nation-state building process in the region".
We have accumulated by our fieldworks a huge amount of data on the understudied minority languages, a part of which (13 languages) are published under the series of Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA). Our data revealed a phenomenon of transphonologization from aspirated/non-aspirated opposition to high/low tone opposition. It also became clear from our data that there used to be three tones instead of two in the open syllable of the proto-Karen.

研究分野：言語学

キーワード：タイ文化圏　ナガ語　カチン語　シャン語　モン・クメール語　ワ語　LSTCA

１．研究開始当初の背景

（１）東南アジア大陸部には、現在の地図には載っていないタイ系民族の小さな「王国」が13世紀から20世紀にかけて数多く存在していた。植民地期を経て近代国民国家形成の流れの中でこうしたタイ系民族の「小王国」は消滅してしまったが、緩やかな一体性を持った一つの文化圏としての存在は現在においてもなお現地で感じることができる。そこで我々はこの地域を「タイ文化圏」と名付け、言語・文化の研究を進めてきた結果、この地域の社会構造が近隣の中国やビルマ、ベトナムなどとは根本的に違った構造を持つことが分かってきた。

（２）ところが、この地域の言語・文化に関する資料は極めて乏しく、わずかに存在する文献資料や調査資料も、この地域を近隣中央集権国家の辺境として扱うばかりで、極めて偏見に満ちた一方的な状態であった。そこで我々はこの地域を内部から眺めるための新しい資料収集活動が不可欠であると考えるとともに、独自の文字資料を持たない社会を研究する方法として、現地で収集した言語資料や文化資料を当該地域の歴史研究に応用する方策を探ってきた。

（３）こうした新しい方法によって、なぜタイ系の「小王国」が滅びてしまったのか、タイ系国家の中でなぜ現在のタイ王国だけが近代国家として生き残ることができたのか、という疑問の答えが見つかると考えた。

（４）「タイ文化圏」は長年政治的・地理的問題を多く抱えていたため、必要な実地調査がまともに行われておらず、その言語・文化に関する資料が量的にも決定的に不足しており、十分な準備をして慎重に調査を行えば未知の言語が数多く発見できるであろうことも容易に想像できた。

２．研究の目的

本研究計画は次の四つの目的のもとに計画された。

（１）13世紀から20世紀にかけてタイ系民族が中心となって形成されていたタイ、ビルマ、ラオス、中国にまたがる山間盆地地帯（タイ文化圏）の言語・文化に関する科学的資料が極めて乏しい現状を改善すべく、積極的なフィールドワークによってその言語・文化資料を幅広く収集し、世界で最も優れたデータベースを作り上げる。

（２）支配民族が書き残した一方的な文献資料によるのではなく、現地調査で収集された言語・文化資料を駆使して、東南アジア大陸部の歴史の中で、少数民族とされているグループの果たした役割を明らかにする。

（３）言語資料を歴史研究の資料として使う方法を深化・発展させる。

（４）少数民族が支配民族の文字を使って書き残した文字資料や口頭伝承などを分析し、言語研究や歴史研究に役立てる。

３．研究の方法

タイ文化圏に関する既存の言語・文化資料は、近隣中央集権国家の辺境地域として記録されているものばかりで、その本質を理解するにはあまり役に立たない。また、政治的・地理的な悪条件もあって、その量という点からも決定的に不足している。どういう言語を話しているのか全く分かっていないグループがたくさんある中で、我々は積極的な現地調査により、タイ文化圏の言語・文化についての新しい資料収集に努めた。特に、ナガ系言語、カチン系言語、ラワン系言語、モン・クメール系言語など、伝統的な文字を持たない言語を重点的に調査し、言語の異同と話し手が帰属していると感じる社会集団との関係を精査した。また、言語の異同と地理的な分布及び言語接触、文化接触の関係についても考察した。

４．研究成果

（１）ビルマ・インド国境付近に居住するナガ族という集団は、一つの「民族」と考えら

れているが、その言語は一つのグループと考えることはできない。一部の言語はほかのナガ語よりもカチングループのジンポー語と近い関係を持っていることが判明した。ところが、彼ら自身は「ナガ族」という一つの「民族」と考えている。言語は違うが、同じアイデンティティーを持った一つの「民族」と考えられている。

（2）一方、そのジンポー語は、カチングループの間の共通語になっているのだが、カチンというグループも言語から見れば一つのグループを形成しているとは言い難い。ビルマ系言語を話すグループもあれば、かなり離れたロロ系言語を話すグループも「カチン族」の中には含まれている。しかしここでも彼らは、自分たちは「カチン族」だと考えており、その一体性を支えるような社会システムも存在している。

（3）ナガやカチンのように、異なる系統の言語を話すグループを一つの社会に結び付ける構造は、「タイ文化圏」に特徴的なもので、盆地に居住するタイ系民族が周辺の山地民をその社会に組み込んでいる形ときわめて類似している。こうした社会が強力な中央集権的な国家を形成することは難しい。

（4）ナガ語やカチン語におけるタイ系言語の影響を指摘する研究はこれまでほとんどなかったが、我々の調査研究によってタイ系言語の中のシャン語（特にカムティー・シャン語）の影響がかなり強いことがはっきりした。ただ、中国やビルマなどとは違って、シャン文字が「タイ文化圏」の中で広く普及することはなかった。

（5）一方、漢族とは、元来は異なるグループから形成されていたものが、その異質性を失って一つのグループになったものであり、こうした漢族グループ（文明人）に同化できなかったグループが「少数民族」（未開人）として辺境に追い込められている社会が中国である。これは言語の面で、漢字語（漢字音）については各「方言」の間の音韻対応は極めて規則的であるが、口語についてはかなり不規則である点から明らかである。同じように、ビルマも同一化されたビルマ族（文明人）と辺境に追い込められた「少数民族」（未開人）から成り立っている社会で、「タイ文化圏」の社会とは根本的に異なる社会である。中国における漢字や漢字語、ビルマにおけるビルマ文字やビルマ語の普及は、「タイ文化圏」におけるシャン語やシャン文字の普及とは比べ物にならないくらい広く普及している点からも両者の違いは明白である。

（6）「タイ文化圏」の「王様」は経済的に力を持つ存在ではなく、このような社会が存続するには、何らかのサポートが必要である。植民地期以前は中国やビルマがこうした「小王国」を支え、植民地期以後はイギリスやフランスが支えた（あるいは、利用した）。こうした外部からの支えがなくなったことで、最後に残ったラオスのルアンパバーン王朝も 1975 年には消滅してしまった。

（7）では、タイ系民族国家の中で唯一近代国家となった現在のタイ王国はどうして消滅しなかったのだろうか。その理由は簡単である。アユタヤー、トンブリー、チャクリーと続く現在のタイ王朝は「タイ文化圏」の「小王国」とは違い、その王様が交易によって経済的な富を築いていたからである。つまり、現在の「タイ王国」は、ある意味、最もタイ的でないタイ系国家なのである。

（8）我々の調査研究の結果、数多くの未知の言語が発見されて記録されたことは特筆すべき成果の一つである。収集された未知の言語のデータを世界の研究者が自由に使えるように、Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA)というシリーズを立ち上げ、研究期間中 13 言語のデータを公開した。これらはいずれも話し手の数が少なく、いずれ消滅する可能性が極めて高い言語ばかりであって、世界の研究者からは非常に高

い評価を得ており、学会発表や論文で引用されるケースが増えてきている。このシリーズを更に続けてほしいとの要請も数多く来ている。公開されたデータには6桁の統一コードを付けており、比較研究には大変都合の良いものに編集されている。また、すべてのデータが統一された基準の基に収集されたものであり、この点でも世界に類を見ない良質なデータベースになっている。

（９）これまで知られていなかったデータが数多く収集できたことにより、言語学上の多くの未解決の問題を解決に導くことができた。中でも、有気音/無気音の対立が声調の高/低の対立に変化した言語が世界で初めて発見され、声調発生のメカニズム解明に新たな視点を加えたことは世界の学界に大きなインパクトを与えた。また、カレン祖語の開音節に三つの声調があったことも明らかになり、この分野の研究で世界をリードする立場になった。

（１０）モン・クメール系言語の中のワ系言語の文法記述が大きく進展し、地理的分布及び内部差異についての詳細な情報が得られた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　６　件）

①山田敦士，パラウク・ワ語の二つの名詞化標識，北海道言語文化研究，16 巻，査読有，2018，87-97

②山田敦士，パラウク・ワ語における漢語借用語，饕餮，25 巻，査読無，2017，62-71

③山田敦士，パラウク・ワ語における語類，北海道言語文化研究，15 巻，査読有，2017，39-48

④YAMADA Atsushi，Toward the linguistic ethnography of the Wa people，Journal of the Center for Northern Humanities，Volume 10，査読無，2017，165-174

⑤山田敦士，パラウク・ワ語における共時的な語形成，北海道言語文化研究，14 巻，査読有，2016，11-20

⑥山田敦士，滄源ワ族の碑文テクスト(2)，北海道民族学，12 巻，査読有，2016，75-83

〔学会発表〕（計　３　件）

①YAMADA Atsushi，Word order in the Wa languages，2016 年，International Conference on Austroasiatic Languages Workshop，Myanmar Center，Chiangmai University，Thailand

②山田敦士，ワ語における多音節単純語の分析，2015 年，日本言語学会第 151 回大会，名古屋大学

③山田敦士，滄源ワ族自治県の文字使用状況：無文字から多文字併存へ，2015 年，社会言語科学会第 36 回大会，京都教育大学

〔図書〕（計　１３　件）

① SHINTANI Tadahiko，ILCAA，Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.116，The Thaidai Language，2018，xxiii+268

② SHINTANI Tadahiko，ILCAA，Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.115，The Yingtalay Language，2018，xxiii+267

③ SHINTANI Tadahiko，ILCAA，Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.114，The Khrangkhu Language，2018，xxiii+267

④ SHINTANI Tadahiko，ILCAA，Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.113，The Khwingsang Language，2018，xxiii+267

⑤ SHINTANI Tadahiko，ILCAA，Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.112，The Blimaw Language，2017，xxiii+267

⑥ SHINTANI Tadahiko，ILCAA，Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.111，The Gokhu Language，2017，xxii+267

⑦ SHINTANI Tadahiko，ILCAA，Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.110，The Matu Language，2016，xxiii+267

⑧ SHINTANI Tadahiko, ILCAA, Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.109, The Nangki Language, 2016, xxiv+267
⑨ SHINTANI Tadahiko, ILCAA, Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.108, The Va (En) Language, 2016, xxii+267
⑩ SHINTANI Tadahiko, ILCAA, Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.107, The Siam (Hsem) Language, 2016, xxii+267
⑪ SHINTANI Tadahiko, ILCAA, Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.106, The Kadaw Language, 2015, xxv+265
⑫ SHINTANI Tadahiko, ILCAA, Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.105, The Zotung Language, 2015, xxiii+265
⑬ SHINTANI Tadahiko, ILCAA, Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.104, The Shanke Language, 2015, xxiii+265

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
新谷　忠彦（SHINTANI Tadahiko）
東京外国語大学・その他部局等・名誉教授
研究者番号：９０１１４８００

(2)研究分担者
山田　敦士（YAMADA Atsushi）
日本医療大学・保健医療学部・准教授
研究者番号：２０６０９０９４

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）